

広島県立歴史博物館

研究紀要

第26号



- 資料紹介 「栗山堂銭筵詩画卷」(重要文化財「菅茶山関係資料」)の
翻刻及び訳注について…………… 吾 田 朱 里 1
 - 研究ノート 広島頼家伝来の細川家犬追物と上覧相撲の図について …… 川 邊 あさひ 27
 - 二つの「今中大学日記」の比較による両日記の性格と特色 …………… 久 下 実 37
 - 「縮景園図巻」について—十八世紀末の縮景園に係る歴史資料— ……… 白 井 比佐雄 47
 - 「縮景園記稿本」について—新発見の頼春水著「縮景園記」草稿— ……… 白 井 比佐雄 85
 - 「山陽先生詩稿」訳注(三)…………… 花 本 哲 志 116
-
- クサイツ・草出・草土—草戸千軒の呼称について— …………… 下津間 康 夫 (1)

BULLETIN
of
the Hiroshima Prefectural Museum of History

Vol.26

2024

Names of Kusado Sengen-cho Site on Historical DocumentsSHIMOZUMA Yasuo (1)

Materials introduction : Re-engrave and translation note of the handscroll

“Ritsuzandousenenshigakan”AZUTA Akari 1

A study on the illustrations of the Hosokawa clan’s Inuoumono and Sumo was

performed in front of the Shogun, inherited by the Hiroshima-Rai clanKAWABE Asahi 27

Charactaristic of Two “IMANAKA-Daigaku-nikki” (IMANAKA Daigaku’s Diary)

through comparison KUGE Minoru 37

Consideration on “Shukkeien-zukan” (Shukkeien-garden illustrated handscroll)

—Historical materials related to Shukkeien at the end of the 18 century— SHIRAI Hisao 47

Consideration on “Shukkeien-ki kouhon” (manuscript of “Shukkeien-ki”)

—Newly discovered draft of Rai Syunsui’s “Shukkeien-ki” — SHIRAI Hisao 85

Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part3 HANAMOTO Satoshi 116

御挨拶

広島県立歴史博物館は、中世の港町・市場町である草戸千軒町（鎌倉時代から室町時代にかけて繁栄した町）の遺跡、近世後期の備後国神辺（現在の福山市神辺町）出身の漢詩人・儒学者・教育者である菅茶山の関係資料、日本屈指の古地図資料を集めた守屋壽コレクションを中心に、広島県の歴史と文化を発信する拠点として、また、生涯学習の推進施設として、地域文化の向上に努めているところです。この研究紀要は、調査研究の成果を広く公開し、活用することを目的に刊行しています。

さて、今回の研究紀要には、重要文化財菅茶山関係資料の中から「栗山堂餞筵詩画卷」の翻刻と訳注、広島頼家に伝わる細川家の犬追物と上覧相撲の図について資料の年代を検討し頼家に伝来した経緯に関する考察、二篇の「今中大学日記」を比較することで明らかとなった特色と両者の関係性、十八世紀末の縮景園の景観を描いた『縮景園図巻』に記録された縮景園の改修内容の検証結果、縮景園の景観を描写した『縮景園記』の草稿である『縮景園記稿本』に関する資料紹介、広島頼家関係資料の中から頼山陽の漢詩草稿の訳注の取組、草戸千軒の呼称に関する一考察の七編の論考を収録しました。

あらためて、当館の調査研究活動に御支援・御協力を頂いた多くの方々に感謝の意を表し、本書が今後とも広く活用されることを念願して、発刊の御挨拶とします。

令和六年十二月

クサイツ・草出・草土－草戸千軒の呼称について－

下 津 間 康 夫

はじめに

草戸千軒町遺跡（広島県福山市草戸町所在）は、備後南部第一の河川である芦田川が瀬戸内海に注ぎ出る河口付近に成立した中世の集落遺跡である。昭和36年（1961）の第1次調査以来、三十数年にわたる発掘調査により、13世紀中頃から16世紀初頭にかけて、「津」・「市」の機能を中心に、主に近郊から芦田川下流域を中心とする地域の流通・交通の一拠点であったことが明らかになった¹⁾。

この集落に関して、史料に「草津」²⁾・「草井地」³⁾・「草出」⁴⁾・「草土」⁵⁾・「草出津」⁶⁾・「草戸」⁷⁾等と記される名称が相当すると捉えられている。この地名について、近年、木村信幸氏により、空間構成説が提唱された⁸⁾。集落全体を指すのが「クサイツ」であり、津（草津・クサツ）・市（草市・クサイチ）・開墾地（草土・クサト）から構成されるというものであるが、疑問を抱かざるを得なかった。ここでは、木村氏の説とともに、あらためて草戸千軒町遺跡に関する地名を検討してみたい。

1 奈良西大寺末寺帳の「クサイツ」

木村氏の空間構成説の基盤をなすのは、明徳2年（1391）に作成（書改め）の奈良の「西大寺諸国末寺帳」である。西大寺の中世の末寺帳については、松尾剛次氏が翻刻と史料批判を行われている⁹⁾。明徳2年の末寺帳は、西大寺の長老が住む坊である二聖院に保管されたもので、各国ごとに末寺を列記しており、多くの末寺に所在地の地名が注記されている。備後国では「尾道」の「浄土寺」、「クサイツ草■」の「常福寺」、「今高野 大田庄」の「金剛寺」の3箇寺が挙げられる。常福寺は、草戸千軒町遺跡の西側にある現在の明王院になり、共に国宝の本堂は元応3年（1321）、五重塔は貞和4・正平3年（1348）の建立である。「クサイツ草■」については、草戸千軒町遺跡研究の先駆者でこの末寺帳の写本を閲覧した濱本鶴賓氏が、クサイツを読み方として■を「土」ではなく「出」とされ¹⁰⁾、松尾氏も「出」と翻刻されている。一方、木村氏は広島県立歴史博物館が作成した複製品から、■は「土」であり、「クサイツ」と「草土」は別個のものとされている¹¹⁾。

この末寺帳には255箇寺が載り¹²⁾、注記された地名は、漢字表記が中心で片仮名表記もある。地名が複数記されたものは7箇寺あり、具体的には、「如意輪寺」（大和国）の「塔尾 吉野」、「宝泉寺」（河内国）の「布忍ヌノシ」、「大岡寺」（伊賀国）の「八鳥 服部」、「観音寺」（豊前国）の「城ミヤコ」、「宝生寺」（肥前国）の「彼杵 ソノキ大村」と、備後国の「常福寺」と「金剛寺」である。「塔尾 吉野」は「吉野」地域の中の「塔尾」、「今高野 大田庄」は「大田庄」の中の「今高野」、「八鳥 服部」は同音異字、「布忍ヌノシ」と「彼杵 ソノキ」は読み方を記したものと捉えられる。なお、豊前国では「ミヤコ」のみが注記される寺院がある¹³⁾。地名が複数記されたものは少数で、その中で漢字と片仮名の併記は、読み方を記したもので「クサイツ草■」もその例ではあるまいか。

西大寺の末寺に関するものとして、永享8年（1436）の「西大寺坊々寄宿末寺帳」¹⁴⁾がある。光明真言会の際に各地から西大寺へ集まる末寺の僧が寄宿する坊ごとに、末寺を列記したもので、多くに所

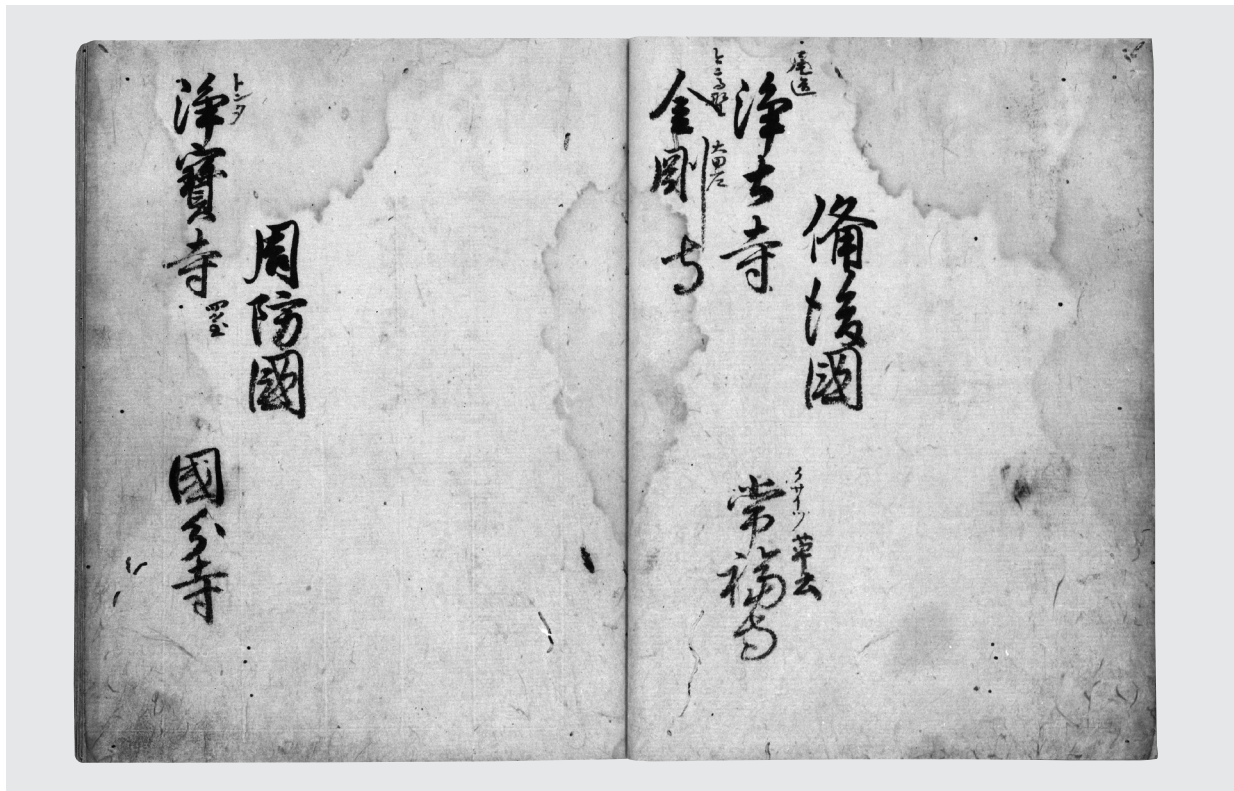


写真 1 西大寺諸国末寺帳（広島県立歴史博物館蔵、複製資料、原資料：奈良市西大寺蔵）

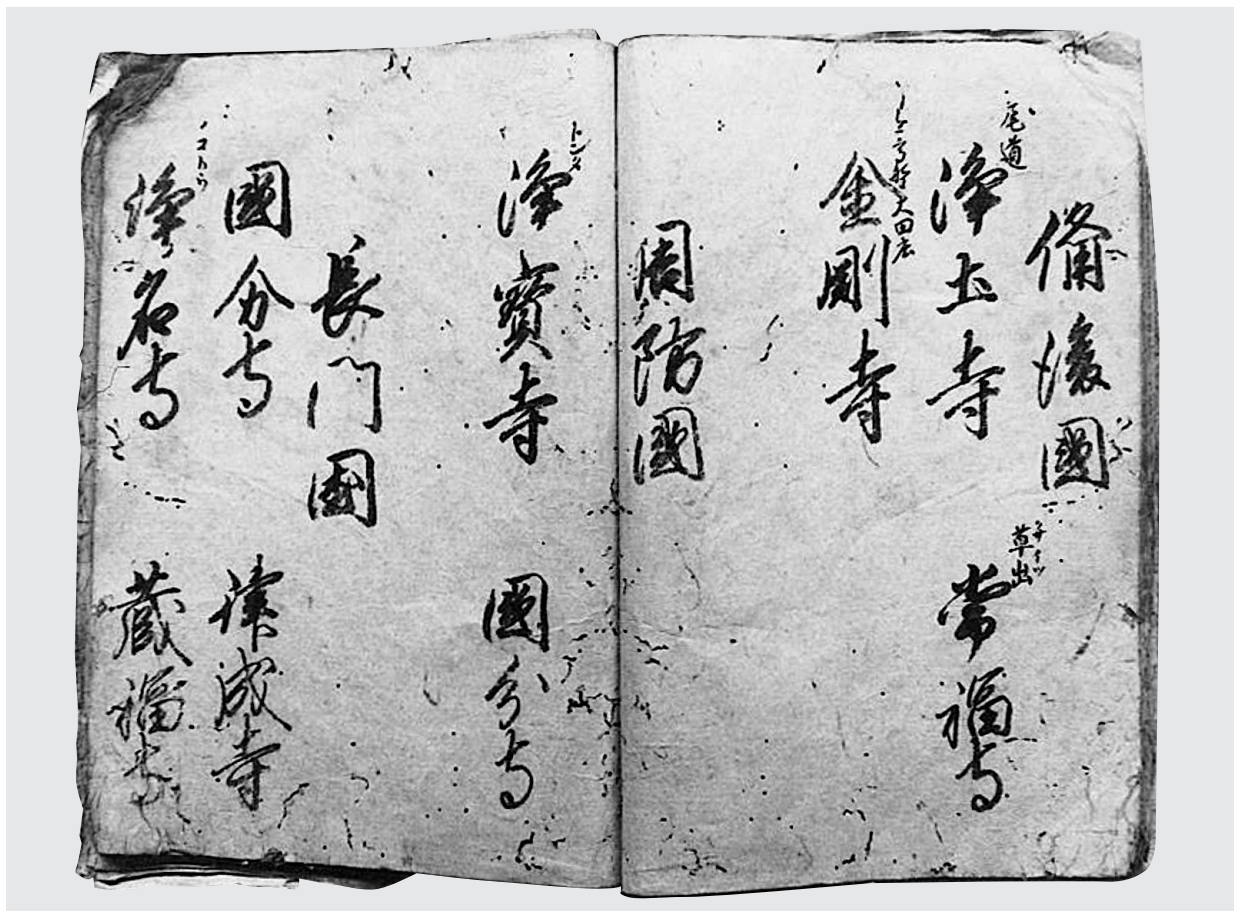


写真 2 西大寺諸国末寺帳（鎌倉市極楽寺蔵、写真提供：山口県史編さん室）

在地が注記されている。「備後国尾道」の「浄土寺」は二聖院、「備後クサイツ」の「常福寺」は東室三、「備後イマ高野」の「金剛寺」は南室二である。なお、この末寺帳にある所在地は、明徳2年の末寺帳のように複数の地名が記されるものはない。ちなみに、「如意輪寺」と「観音寺」は見当たらず、「宝泉寺」は「河内布忍」、「大岡寺」は「伊賀国」、「宝生寺」は「肥前国ソノキ郡」である。

また、享徳2年(1453)から長禄元年(1457)の間に記された末寺帳があり、これも松尾剛次氏が翻刻されている¹⁵⁾。明徳2年の末寺帳と同様に、各国ごとに末寺を列記しており、多くの末寺に所在地の地名が注記されている。複数の地名が記されたものは少数で、その中で漢字と片仮名の併記されたものは、「善養寺」(備中国)の「ナリウ 成羽」、「観音寺」(豊前国)の「ミヤコ 城」、「寶生寺」(肥前国)の「ソノキ 彼杵大村」と「常福寺」の「クサイツ 草■」¹⁶⁾である。「ミヤコ」・「ソノキ」・「クサイツ」は明徳2年の末寺帳と重複しており、「ナリウ」は「成羽」の読み方を示すものであろう。

以上の西大寺に伝わる末寺帳とは別に、神奈川県の大磯寺にも明徳2年に作成(書改め)の「西大寺末寺帳」が伝わっており、『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』に所収されている¹⁷⁾。備後国は同じく「尾道」の「浄土寺」、「今高野大田庄」の「金剛寺」があり、「常福寺」は「草出」とその右側にふりがなのように「クサイツ」が注記されている。この部分の写真を見れば、「土」ではなく「出」であり明らかに「草出」である¹⁸⁾。この末寺帳で同様のふりがなのような記載は、「寶泉寺」(河内国)の「布忍」と「ヌノシ」、「寶生寺」(肥前国)の「皮杵大村」と「ソノキ」¹⁹⁾があり、「クサイツ」・「ヌノシ」・「ソノキ」は西大寺に伝わる明徳2年の末寺帳にも記される²⁰⁾。

西大寺の末寺帳の作成にあたっては、寺院の事務方が関与し、諸国の末寺情報が集積されたことであろう。備後国の常福寺の所在地については、「草出」ないし「草土」と「クサイツ」である。上記の例から、例えば難読の範疇にあり、事務方が読み方を記すべきと判断した地名については、片仮名で読み方を併記したと捉えるのが自然ではあるまいか。そして、「出」と「土」はくずし字が類似しているのである。漢字での所在地表記と併せて、片仮名の「クサイツ」は読み方を記したものであろう。

2 草出津と草津

「クサイツ」が読み方と判断される中で、漢字で表記すれば「草出」だけでなく「草出津」も相当するだろう。「津」は船着場や港を意味しており、集落の性格を表すものである。そして、集落の名称を「草津」と記すものもある。

木村氏は、明徳2年の西大寺の末寺帳の「クサイツ草■」について、「クサイツ」を漢字表記すれば「草出」になり、その中の港が「草出津」とされている。ただし、この「草出津」の読み方には何故か触れられていない²¹⁾。また、「草出」の「津」(草出津)を「草津」と省略して呼んだと推測されている²²⁾が、果たしてそうだろうか。

「津」を象徴するものとして船舶が往来する水路を挙げることができよう。発掘調査では、舟材を井戸などの構築物に転用したもの²³⁾や、集落の成立期から終焉まで芦田川や瀬戸内海に通じていたことが想定される水路を確認しており²⁴⁾、遺跡包蔵中洲は、「津」と呼ばれるにふさわしい場所だったと言えるだろう。また、地名を示す「くさい(つ)」と記された木簡がS K 1300土坑から出土している²⁵⁾。14世紀中頃のこの土坑から出土した木簡の記載内容から、集落に拠を置いて多様な活動をした者の存在が明らかになっている。周辺地域を対象とする金銭の貸付や年貢・租税などの収納と運営、食品加工・醸造業の展開などである。木簡は記録簿や付札と使用されており、「くさい(つ)」は宛先を示すと推定

されるものである。

このように、集落の名称として「くさいつ（づ）」が挙げられ、漢字で表記すれば、「草出」・「草出津」となる。発掘調査から集落には「津」にふさわしい施設である水路の存在も明らかになった。「津」を示す「草津」の読みは「くさつ（づ）」であろう。

3 草井地と草土

遺跡からは「くさいち」が記された木簡も出土している²⁶⁾。「こい」（小井、現福山市駅家町内の可能性がある）の地からの「しやうせい」（正税）である「くしかき」（串柿）の付札で、「くさいち」にいる「いまくらとの」（今倉殿）に宛てられたものであり、集落が当時「くさいち」と呼ばれたことを示している。この木簡が出土したS D510溝は、芦田川や瀬戸内海に通じていたことが想定される水路網の一環で、まさに「津」の象徴の施設である。木簡は溝を廃止して埋め立てた層位に含まれており、時期は15世紀後半になる。

観応2・正平6年（1351）に、上杉朝定は海路輒へ上陸し「草井地」から備中へ高師泰を追撃している²⁷⁾。地理的な位置や地名の「くさいち」の存在と漢字の読みから、「草井地」が遺跡の集落を指すことは間違いないだろう。

さて、「クサイツ」や「くさいち」のように仮名で表記されたものは、集落の読み方を示しているが、漢字で表記されたものは読み方の判断が難しい場合もある。「草土」の「土」については、「と（ど）」だけでなく「ひち」²⁸⁾とも読め、「草土」で「くさひち」や「くさいち」と読まれた可能性もある²⁹⁾。「草井地」と「草土」読みは共に「くさいち」だったこともあり得るのである。

木村氏は、「草井地」は「草出」の「井地」（市）であり、「草市」と省略して呼んだと推測され、空間構成として発掘調査を実施した遺跡包蔵中洲の地が主に市（草市）になり、中洲の西側の山際が開墾地（草土）とされている³⁰⁾。そして、「草出」の内部にある複数の港湾施設部分が「草津」とされるが、果たして、集落の特定施設のみを地名として呼ぶことがあるのだろうか。

「草土」については、刀の銘にも見られる。19世紀初頭に完成した福山藩内の地誌である『福山志料』には、備後国の刀工「實家」が永享年間（1429～41）に刀を制作しており、「草土」ないし「草戸」の在住であったことを刻んだ銘が収録されている³¹⁾。なお、「草戸」の表記は16世紀末の小早川隆景の書状に、16世紀初めの事項として登場する³²⁾。

4 文字表記と読み方

これまで触れてきたように、集落の名称について、仮名の表記は読み方を表すこと（濁音の判定までは至らないが）は確かであるのに対して、漢字の表記は実際の読み方の確認までは至らないのである。読みとして、「くさいち（ち）」と「くさいつ（づ）」は確実であり、漢字表記では「草井地」・「草土」や「草出」・「草出津」になるだろう。

表1は史料等に登場する集落の名称を整理したもので、さまざまな在住地や立場の者が記していることが分かる。複数に及ぶ名称の仮名と漢字の表記については、読み方（仮名表記）から漢字表記が導かれ、漢字表記から読み方（仮名表記）が導かれることがあったのではなかろうか。福山市鞆町の安国寺にある木造阿弥陀如来立像は、文永11年（1274）に造立された際に胎内に勧進帳³³⁾が納められ、そこに記された「くさいて」も集落を示し、漢字表記では「草出」になることが指摘されている³⁴⁾。そして

表 1 集落の名称

年 代	地 名	史 料 など
文永11年 (1274)	くさいて	善光寺如来造立勸進帳
康永 2 年 (1343)	草津	時衆過去帳
貞和 5 ・ 正平 4 年 (1349)	草津	内藤肥後徳益丸代審覚軍忠状
観応 2 ・ 正平 6 年 (1351)	草井地	太平記
14世紀中頃	くさい (つ)	出土木簡
明德 2 年 (1391)	クサイツ 草出〔草土?〕	西大寺諸国末寺帳
永享 8 年 (1436)	クサイツ	西大寺坊々 寄宿末寺帳
永享年間 (1429～41)	草土・草戸	刀銘 (福山志料)
文明 3 年 (1471)	草土	山名是豊書状
文明 3 年 (1471)	草土	西国寺不断教修行勸進并上銭帳
文明17年 (1485)	草出津	備後国尾道権現堂檀那引注文
15世紀後半	くさいち	出土木簡
16世紀末	草戸	小早川隆景書状
16世紀末頃	草出津	實報院米良十方主諸国檀那帳

一例であるが、名字の「毛利」の表記が「森」となること³⁵⁾や地名の「草」の表記が「久佐」へ変わること³⁶⁾など、読み方から漢字表記が導かれる例や、漢字表記は同音異字の漢字表記に変化する例を確認できる。そして、漢字表記の同音異字への変化の中に、「草土」から「草戸」への移行があるのではなからうか。

集落の名称を記した者の在住地は、近隣から他国に及ぶ。集落に在住した者が集落をどう呼んでいたかは明らかでない。ただ、江戸時代の記録になるが永享年間 (1429～41) に制作された刀の銘には、「草土」ないし「草戸」と伝えられる。

おわりに

草戸千軒町遺跡を指す地名を整理してみた。仮名の表記は読み方を表す (濁音の判定までには至らない) ことは確かであるのに対して、漢字の表記は実際の読み方の確認までは至らないのである。集落の名を記した者の在住地や立場は多様である。読み方と漢字表記が導き合うことや漢字表記が同音異字の漢字表記に変化することなどから、集落の名称についての文字表記が広がりを見せるようになったのではなからうか。

漢字表記は「草井地」・「草津」・「草出津」・「草出」・「草土」・「草戸」がある。読み方は「くさいち (ぢ)」・「くさつ (づ)」・「くさいつ (づ)」・「くさいて (で)」・「くさと (ど)」が挙げられ、差は「くさ」の次に「い」の発音の有無と語尾の「た (だ)」行の一音の異なりである。この地名の表記については、空間構成説や地名変遷説³⁷⁾でもなく、読み方と表記の導き合いや変化などによる広がりを示すもので同じ集落を指しており、いわば表記併存説というものである。

木村氏の空間構成説に接して、まずは疑問を抱かざるを得なかった。私は昭和57年（1982）から平成6年（1994）まで、西側の明王院を見ながら遺跡包蔵中洲で発掘調査に携わっていた。中洲から西側丘陵の山裾まで狭い場所では150m、明王院までは200mの距離である。遺跡が中洲となったのは昭和初期からの河川改修工事によるもので、中洲に広がる集落は確実に西側に続いているが、河道となって掘削されている。ちなみに、中洲部分の東西幅は150mあり、集落は河道を挟んで東側の高水敷へ広がり東西200m以上になる。このような山裾までの距離や集落の展開の状況から、木村氏の言うような、中洲部分が市（草市・クサイチ）であり、その西側が開墾地（草土・クサト）であるという空間の分割には疑念を抱かざるを得ないのである³⁸⁾。

現在、遺跡包蔵中洲現地に立つことはできないが、架け替えられた法音寺橋が中洲部分の上空を横断している。遺跡の案内表示もあり、ここに立つことで、集落があった場所と明王院の位置関係を実感することができるのである。

今回、空間構成説の提唱を受けて、草戸千軒町遺跡を指す地名についてあらためて整理・検討を行った。起点となった明徳2年の西大寺末寺帳について、仮名表記の「クサイツ」は読み方を示すものであり、漢字表記では極楽寺に伝わる末寺帳は「草出」、西大寺に伝わる末寺帳は「草出」もしくは「草土」

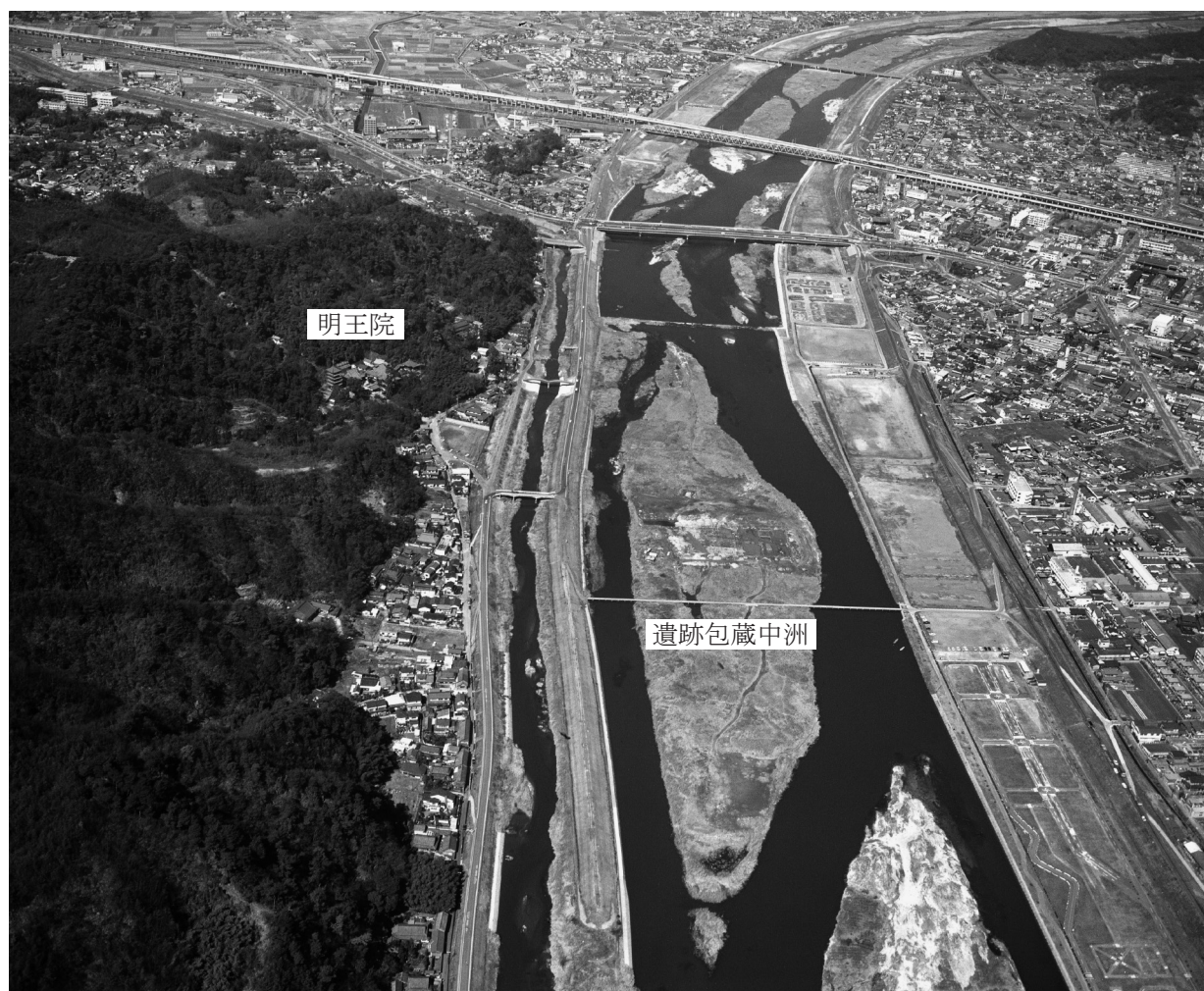


写真3 遺跡包蔵中洲と周辺 1980年、撮影：井出三千男氏

遺跡包蔵中洲は南北600m、東西150mの紡錘形で、遺跡は両側の河道部分へ延びている。

であるが、読み方との関わりの中で捉えるべきものであろう。「草津」・「草出津」と「津」が付される名称に関して、発掘調査で「津」にふさわしい遺構・遺物を確認している。そして、さまざまな史料等に見られる地名は、読み方と漢字表記の導き合いや漢字表記の変化などにより集落の名称についての表記が広がりを見せたものと推定される。

註

1) 5冊の発掘調査報告書が刊行されている。

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編・広島県教育委員会発行

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ―北部地域北半部の調査―』1993年。

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ―北部地域南半部の調査―』1994年。

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ―南部地域北半部の調査―』1995年。

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ―南部地域南半部の調査―』1995年。

『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ―中世瀬戸内の集落遺跡―』1996年。

2) 康永2年(1343)に、時宗の僧が「備後草津」で没している〔『時衆過去帳』〕。

また、貞和5・正平4年(1349)に、足利直冬が鞍―「草津」―尾道を移動している〔『萩藩閥閥録』巻99―2、内藤小源太45号〕。

3) 観応2・正平6年(1351)に、上杉朝定が鞍を経て「草井地」から備中へ高師泰を追撃している〔『太平記』巻29、越後守白石見引返事〕。

4) 明德2年(1391)の「西大寺末寺帳」に、備後国では「草出」にある常福寺が見える〔『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』「極楽寺文書」1号〕。

5) 文明3年(1471)に、山名是豊が坪生から「草土」へ向かって敵方の城を落とした後に鞍で指揮を取っている〔『大日本古文書 三浦家文書』75号〕。

また同年、尾道の西国寺の不断経修行の復活に際して出銭した寺坊の中に「草土」の東泉坊がある〔『広島県史 古代中世資料編Ⅳ』「西国寺文書」4号〕。

6) 文明17年(1485)に熊野詣に向かう備後国の檀那の一覧を記したものに「草出津」が登場する〔『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』「熊野那智大社文書 潮崎稜威主文書」9号〕。

また、16世紀末頃に熊野詣の檀那の所在地等を記したものに備後国の「草出津」が登場する〔『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』「熊野那智大社文書 實報院米良十方主諸國檀那帳」〕。

7) 天正19年(1591)と推定される小早川隆景の書状に、16世紀初めに、渡辺兼は毛利氏の拠である安芸吉田へ暫く滞在し、やがて「草戸」へ戻ったとある〔『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』「山口県文書館所蔵文書譜録」渡辺三郎左衛門直25号〕。

8) 木村信幸「史料から見た草戸千軒」〔『広島県立歴史博物館研究紀要』第23号、2020年〕。

9) 松尾剛次「奈良西大寺末寺帳考―中世の末寺帳を中心に―」〔『三浦古文化』第51号、1992年〕。後に同『勸進と破戒の中世史』〔吉川弘文館、1995年〕に所収。

10) 濱本鶴賓「明王院と草戸中洲の変遷(二)」〔『備後史談』第12巻第7号、1936年〕。

11) 木村氏は、「濱本氏が見た「西大寺諸国末寺帳」は、文亀年間の「交合」の奥書が引用されているので二聖院本である」〔前掲8〕とされているが、濱本氏が見たのは、正確には「西大寺末寺帳は奈良県郡山寓居の古建築仏像研究の権威若井富蔵氏の直接書写して提供された貴重な資料である」〔前掲10〕と、写本である。

また木村氏は、濱本氏の「クサイツ」は読み方という解釈は一顧もされず、松尾氏の翻刻を「誤読」とされているが、このように断定してよいのだろうか。

12) 松尾氏の翻刻による〔前掲9〕〕。

13) 「宝勝寺」に「ミヤコ」が注記されている〔前掲9〕〕。「ミヤコ」は京都郡の系譜をひく地名で、「観音寺」の「城ミヤコ」については、「ミヤコ」地域の中の「城」を示すものだろう。

14) 松尾氏が翻刻されている〔前掲9〕〕。

15) 松尾剛次「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開」〔『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第10号、2013年〕。

16) 松尾氏の翻刻では「クサイツ 草出」とあるが、画像を確認していないのでここでは「出」を保留しておく。

なお、漢字と片仮名混じり（漢字表記と片仮名表記の間に空白がない）として、「佛隆寺」（大和国）の「宇多アカハ子」、「金剛寺」の「イマ高野大田庄」があり、「宇多アカハ子」は「宇多」地域の中の「アカハ子」であろう。

17) 前掲4〕。なお、この末寺帳が『広島県史』に所収された経緯等については、木村氏が整理されている〔前掲8〕〕。

18) 『山口県史 通史編 中世』（2012年）の772頁に掲載されている。木村氏は写真の掲載にも触れ、注記された地名について次のように述べられている〔前掲8〕〕。

極楽寺所蔵の西大寺諸国末寺帳が『広島県史 古代中世資料編V』に紹介され、「常福寺」の右側に「草出」とやや小さく記し、さらに右側にふりがなのように「クサイツ」と添えられて翻刻された。これが草戸千軒町遺跡研究に用いられ、以後顧みられなかった。

ここでは、「クサイツ 草出」にある「常福寺」と捉えられている。氏は二聖院に保管された末寺帳から空間構成説を展開されているが、この極楽寺の末寺帳の記載との差異〔「クサイツ 草土」と「クサイツ 草出」〕には全く言及されておらず、疑問というしかない。

19) 「ソノキ」の漢字表記は本来「彼杵」で、この末寺帳では「彼」が「皮」と記されている。

20) 松尾剛次氏は、明徳2年に奈良の西大寺と鎌倉の極楽寺で末寺帳が作成された背景について、南北朝動乱の終結を機に、西国の末寺は西大寺、東国の末寺は極楽寺が統括するという調整の結果によるものと指摘されている〔「鎌倉極楽寺流の成立と展開ー初代から九代までの極楽寺歴代住持に注目してー」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第14号、2017年〕。

21) 文明17年（1485）に尾道権現堂の大進が、熊野詣に案内する備後国の檀那の一覧を記したものに「草出津」が登場する。檀那の一覧は、「御調之内河南河北」、「新庄之内今津今伊勢」、「御調之郡之内五ヶ之庄之内（此内哥嶋ハ惣持院引候）」、「同山南山北」、「木来栗原吉波」と共に「草出津神上寺跡之後旦那」が挙げられ、それぞれ「悉皆」と付記されている〔前掲6〕の「熊野那智大社文書 潮崎稜威主文書」〕。

木村氏は、「草出津」の中にあつた「神上寺」の跡の後ろ（裏側）の「旦那」とされている〔前掲8〕。なお、前掲6〕の翻刻文を一部修正して掲載されている〕。しかし、他は複数の地名が並列的に挙げられており、「神上寺跡之後」が分かりにくい文言になっているのだが、「草出津」と「神上寺跡之後」は別の場所を示している可能性もある。

22) 足利直冬は中国探題として、貞和5・正平4年（1349）4月に京都を発向して備後国の鞆に拠点を置いているが、同年9月に追い落とされて九州へ向かう（『太平記』巻26・直冬西國下向事、巻27・右兵衛佐直冬鎮西没落事）。備後に在国した5箇月の動向は詳らかではないが、鞆ー「草津」ー尾道を移動している〔前掲2〕の『萩藩閥閥録』〕。

なお、木村氏は『萩藩閥閥録』にある「亡父内藤肥後孫六盛信、去年備州御下向最前馳参草津、致奉公之忠節、令供奉尾道」について、周防に拠を置く内藤盛信は、直冬が備後国へ下向した最初から「草津」へ馳せ参じた（その時点では直冬は鞆に在住）とされている〔前掲8〕〕。しかし、「最前」は「真っ先に」の意があり、盛信は「草

津」にいた直冬の下へいち早く馳せ参じたとも言える。

23) 舟材を構築物に転用した例は、S D 3490溝〔時期は13世紀後半から14世紀前半、『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』で報告〕の護岸用のしがらみ材や、S E 4470井戸〔時期は15世紀末から16世紀初頭、『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』で報告〕の井戸側材がある。

24) 水路の配置等については、岩本正二「第Ⅴ章 まとめ」(『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』)で整理されている。

25) 草戸千軒町遺跡出土木簡312号〔『草戸木簡集成2』広島県立歴史博物館、2000年、資料番号24X00024〕。この木簡は墨書の残存状況は良くなく、「くさい(つの)」が判読できるのみで()は推定文字である。S K 1300土坑については『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』で報告されている。

26) 草戸千軒町遺跡出土木簡203号〔『草戸木簡集成2』広島県立歴史博物館、2000年、資料番号12X00004〕。S D 510溝については『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』で報告されている。

27) 前掲3)。

28) 現在の仮名遣いは「ひじ」であるが、濁音と清音の関連性から「ち」対する「ぢ」で表記した。

29) 「草土」の読み方については濱本鶴賓氏が注目され、光藤珠夫氏が次のように触れられている。

草戸の地名に就て、濱本鶴賓氏の御調査に拠れば、明徳二年書改めの南都西大寺諸国末寺帖に草書で書いてあるのが此地名に見える現存の最古文書であつて、草出とも草土とも見られ、其他古くは多く草土と書いてあるが、太平記に草井地とか草意地と書いてあるのは土が「ひぢ」である故、草土を読み誤つて草井地など書いたのか、初めは「くさいち」であつたのを草土と書き表はし、「くさど」と呼ぶ様に成つたのか研究を要する問題であるとのことでありまして

そして、自らの見解で連想として次のように述べられている。

「くさづ」と云う地名は他にも例があり、「づ」の音が「ど」に転じた例は「おづゝする」を「おどゝする」と申し、土佐の小津から尾土の名が生じた例もありますから、草戸も或は初めは「くさづ」であつたのが鎌倉時代位に「くさど」となつたかなどと想像も生じますが問題であります。

光藤珠夫「草戸の庄の古陶磁」〔『備後史談』第14巻第3号、1938年〕。

30) 前掲8)。氏は地名と遺跡の関係について、次のように述べられている。

このように、「草井地」(くさいち)は「クサイツ」(草出)にあつたことは確実で、発掘調査が実施された草戸千軒町の全部又は一部の呼称であつた。

また、氏は地名の由来を漢字の意味に求めすぎではあるまいか。

「草出」とは、草木が生い茂つて枝を上へ延ばしているところと理解することができ、そのようなところを人々は「くさいづ」と呼び、「草出」という漢字を充てたと考えられる。(中略)

では「草土」はどういう意味なのか、『大漢和辞典』を引くと、「土」は「とち。土壤」のほか、「耕作地。田畑」、「ひらち。平地」を意味する。既に見た「草」と合わせ、「草土」とは、「草の生え茂つた所」を開墾して「田畑」や「平地」としたところ、という意味と考えられる。

この見解では、実際各所に「草出」が成り立つことになる。そして、耕作地・田畑・平地の意味を『大漢和辞典』に依られているが、この意味は『日本国語大辞典』には見られず、「草土」を開墾地と捉えるのは疑問である。

31) 『福山志料』巻27(土産)に、「古刀銘盡大全」に「實家 永享草土一乗打」、「古刀名盡大全別本」に「實家 備後國草戸住一條永享二年八月二日作ト打」とあることが収録されている。

なお、『古刀銘盡大全』〔仰木弘邦著、江戸汲古堂刊、寛政4年(1792)〕では、備後國鍛冶部類に「實家 永享草土一乗ト打」とある。

32) 前掲7)。

33) 『広島県史 古代中世資料編Ⅳ』「安國寺文書」1号

34) 堤勝義「草戸千軒の地名の変遷についてー中世の一時期からー」〔『備陽史探訪』第109号、2002年〕。

木村氏も13世紀後半における草戸千軒の町の存在を史料的に確認したとされている〔前掲8) なお、前掲33)の翻刻文を一部修正して掲載されている〕。

この勸進帳には日付を追って金額と人名が列記されたもので、金額の日計や集計もあるが地名に関する文言は少ない。「くさいて」は確実に草戸千軒町遺跡を指すと断言までには至らず、指す可能性があるという段階になる。

35) 『太平記』の記載の中に見られる〔巻28、三角入道謀叛事〕。『広島県史 古代中世資料編Ⅰ』では「森」が「毛利」であることを注記している。

36) 現府中市久佐町一帯について、中世には「草村」と表記され、尾道の浄土寺に伝わる文書に頻出する〔『広島県史 古代中世資料編Ⅳ』「浄土寺文書」〕が、17世紀後半に「久佐村」に改められている（『日本歴史地名体系 広島県の地名』「久佐村」の項、平凡社、1982年）。

37) 木村氏は草戸千軒町遺跡の地名に関する各種の調査研究報告について、地名変遷説と整理されている〔前掲8)〕。

38) 発掘調査をした中洲と西側の丘陵の間に、開墾地とされる「草土・クサト」を設定するのは広さの面で難しいというしかない。また、中洲部分は16世紀初頭に中世の集落としての賑わいを失うが、木村氏が言われるようにその西側の「草土・クサト」のみが存続したということも成り立たないだろう。

※ 写真2の掲載については、鎌倉市極楽寺の許可を得て山口県史編さん室から提供いただいた。

執 筆 者

吾田 朱里	広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所文化施設事務従事員
川邊あさひ	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館学芸員
久下 実	徳島文理大学文学部教授
白井比佐雄	広島県立歴史博物館アドバイザー
花本 哲志	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
下津間康夫	元広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所学芸員

広島県立歴史博物館 研究紀要 第26号
BULLETIN of the Hiroshima Prefectural Museum of History Vol.26

発 行 日 令和6年12月27日
編集・発行 広島県立歴史博物館
Hiroshima Prefectural Museum of History
〒720-0067 広島県福山市西町2-4-1
2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima
720-0067, Japan
Tel. 084-931-2513 Fax. 084-931-2514

印 刷 株式会社中野コロタイプ